

# 埼玉学園大学・川口短期大学 機関リポジトリ

<書評>

渡辺尚志編『生産・流通・消費の近世史』（勉誠出版、2016年）

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2020-03-26 キーワード (Ja): キーワード (En): production, circulation, consumption 作成者: 福澤, 徹三 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/1273">https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/1273</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



書評

渡辺尚志編

『生産・流通・消費の近世史』

(勉誠出版、2016年)

Takashi Watanabe “Seisan ryūtsū shōhi no kinsei-shi”

福澤徹三

FUKUZAWA, Tetsuzo

本書は、主体的に生きる百姓たちの姿が、各地域・各分野の研究から明らかにされている研究の現状を踏まえ、生産に工夫を凝らし、物流を担い、消費生活を向上させていった、近世経済社会の主役としての百姓たちの姿をさまざまな角度から明らかにすることを目指してまとめられた、5部構成からなる編書である。まずは章立てと執著者を掲げよう。なお、部ごとに各部第1章の著者による総論が記されているが、以下では省いている。

総論 生産・流通・消費の近世史 (渡辺尚志)

第1部 食料と肥料

第1章 関東主穀生産地帯における米の生産・流通と消費の諸相 (平野哲也)

第2章 関東内陸農山村における魚肥の消費・流通と海村との交易 (平野哲也)

第3章 下肥と野菜 (小林風)

第2部 衣料と嗜好品

第1章 近世の百姓と衣服 (千葉真由美)

第2章 近世後期における酒の生産・流通・消費 (高橋伸拓)

第3章 煙草の生産・流通・消費 (武井弘一)

第3部 書物と文具

第1章 上総国における書籍流通拠点の成立 (鈴木俊幸)

第2章 江戸の消費文化と文房具 (工藤航平)

第3章 山中紙と松代藩御用紙の生産、流通、

消費について (降幡浩樹)

第4部 水産資源と環境

第1章 近世における水産資源変動と山林・獣害 (高橋美貴)

第2章 近世における網漁の展開と生態利用 (真鍋篤行)

第3章 「里湖」の生態系と近世都市の水産物消費 (佐野静代)

第5部 山間の村の暮らし

第1章 徳島藩領下の山村と「上毛」生産 (小酒井大悟)

第2章 年中行事に見る山間村落の社会構造 (鈴木直樹)

総論では、①生産・流通・消費を一貫して把握する、②生業の複合性、③環境・資源への注目、④文化を支えた「モノ」の4点を基本的な視角とすると述べ、信濃国の街道沿いの村における生産・流通・消費と、出羽国の山付村落における生産と文化的交流、伊豆国の海付村落における生業複合を分析する。

第1部は、食料の生産・流通・消費を一貫して把握することが目的とされ、第1章では村方地主が米穀商売を通して、周辺地域の小百姓(生産者・消費者)、都市・町の米穀商人、遠隔地域の消費者と領主を繋ぐ要となった様子が活写され、第2章では漁網に用いられる麻の生産地帯と海村の魚肥生産地帯の交流が、主穀生産地帯での魚肥消費とも併せて論

キーワード：生産、流通、消費

Key words : production, circulation, consumption

じられる。第3章は、近世中後期の江戸西郊地域を事例に、下肥をはじめとする肥料購入と野菜生産との関係を約100年にわたって分析し、定説でいわれていたような下肥依存度の低下は必ずしも当てはまらない側面を指摘した。また、野菜生産の過大評価の再検討も新たな課題として浮かび上がらせた。

第2部では、日々の暮らしにおいて楽しみを持つ消費者としての百姓のすがたに迫った。第1章では、村での衣服に関わる諸作業が高い技術力の存在によってなされていたことが示され、人相書から衣服の流行傾向を160年間もの長期間にわたり検討した。第2章では小売酒屋で販売された消費先の具体相に踏み込んで分析した結果、酒の販売先と漁師という生業との強い関わりがうかがえた。第3章では加賀平野を事例に検討した結果、煙草を百姓が生産する理由は保存可能な商品であった点が大きいことや、百姓自身も喫煙を楽しんでいたことが判明した。

第3部第1章では、一村役人の手跡指南の動向を追跡し、地域における書籍業成立の前提と営みの現実を描いた。第2章は、民衆にまで読み書き能力が必要とされた江戸時代では欠かせない文房具の消費（紙・筆・筆）、流通（紙）、生産（紙）について検討し、文房具の消費には、享保期と文化・文政期の2つが画期であったことを述べた。第3章では、松代藩領の紙生産・流通・消費の実態を、専売制が実施されなかった理由や、藩領に接する集荷先である善光寺町と村むらとの関係に着目して明らかにした。

第4部では、近世における自然資源利用の特徴に具体的な地域事例から光を当てることをねらいとした。第1章では海洋回遊資源の漁況変動の影響を意識しながら地域史を描く作業に取り組み、伊豆国内浦で17世紀後半の〈不漁〉を契機として社会関係や自然資源利用の枠組みが出来上がってくる様子を究明した。第2章では、絵馬資料の分析を通じて、関西漁民の地曳網が房総半島東岸の環境と複合し、地元漁民による新たな大地曳網が形成される過程を明らかにした。第3章では、近世の生業が水辺の「自然」へと与えた影響について、「里湖」の生態系の確立には18世紀に画期があり、それは京都での消費活動と結びついた動きであった可能性の高いことを示した。

第5部では、「緒についたばかり」の山村史研究において、村内部における百姓同士の関係やその変化に注目する。第1章は慶長13年（1608）検地帳において上毛（いわゆる「四木」（漆・桑・楮・茶）プラス柿と栗）記載が見られ、すでに畠を中心に商品作物生産が行われていることを手掛かりに、さらに身分を中心とした村の変容を明らかにした。第2章では、山間に生きる人々の暮らしの具体的な様相は分からない部分が多いことを課題に掲げ、食事を中心に年中行事から見える村落の社会的な構造の実態解明に取り組んだ。

本書の内容は以上である。百姓のすがたを具体的に明らかにするという編者、執筆者の意図が各論考に反映されていて、多くの点で興味深い事実が判明した。総論では一般百姓からかけ離れたものではなかったと思われる村内上層の村役人層の90年にわたる年間の収入額と支出額が示され、18世紀末以降平均して5日に3日は貨幣を使用していたという。ここからは、村の経済社会化の実態がととてもよく理解できる。そして、麻と魚肥の取引における「のこぎり商い」（第1部第2章、以下「I-2」のように表す）や、人相書から衣服の柄や色が1760年代以降は縞が主流であったこと（II-1）、酒の消費が漁業（および林業）といった生業と不可分であったこと（II-2）、地曳網の奉納絵馬の図像が、享保期は網主が配下の船方らとの共同を意識したものであったのが、近世後期になると両者の疎隔が拡大していることを暗示していることなどである（IV-2）。また、京都での生洲とよばれる料理屋の盛行と鯉鮒の消費、輸送の実態（IV-3）と、徳島の山村での日常と四季の行事での食事の実態および人間関係の有り様はととても生き生きと論じられており、具体的な様子が目に浮かぶようであった（V-2）。一方で、百姓の衣服が華美になっていくことに対して、支配側が黙認していたわけではないこともきちんと押さえている（II-1）。

生産・流通・消費を一貫して把握するという点では、I-1で村方地主が江戸や宇都宮の複数の米穀商人と対等の取引関係を築く一方、居村内外の小百姓の消費に応じて地域販売も行っている姿から地主の米穀商売と小百姓の米穀生産・消費は密接不可分

に結びついていることが勉強になった。同一種類の商品が双方向に移動し、最終消費に繋がっていたのである。このように、編者が総論で述べた4つの基本的視角について多くの新しい知見が示されている。

評者の関心からは、特産品の形成と領主支配の関係も興味深かった。伊豆国内浦では近世初期塩の生産を行っていたが途絶し（Ⅳ－1）、松代藩山中の紙生産は同じ信濃国上田藩や松本藩が専売制をとったのに対して、民間の流通機構や市場を活用する道を選んだ（Ⅲ－3）。一方で、徳島藩では近世初期から商品作物の把握に努め、紙専売制が幕末まで維持された（Ⅴ－1）。生産・流通・消費を一貫して把握するという方法を用いることによって、地域に大きな影響を与える国産品の形成過程の解明も視野に入ってくるだろう。

もう1点は、前貸しと金融（具体的には利息）の関係である。80年代までの研究では、流通で集荷する側の金融を梃子にした前貸しは則ち悪とされていたが、本書はそのような考えとは立場を異にしている。主にⅠ－1やⅢ－3で取り上げられている村方地主や問屋と小百姓の間でそれが行われている場合、利息の設定や返済の猶予はどのような実態だったのか。経営帳簿の分析で検討していく余地が残されている。

（勉誠出版、2016年、8000円〈税別〉）